

MINAMI HIRUTA

渡瀬在住・学校法人石川高等学校1年

目指すは海外で活躍するプロゴルファー

蛭 田みな美さん(15)、姉の彩子さん、兄の玲於さんの「蛭田三きょうだい」といえば、鮫川村に留まらず東北のジュニアゴルフでは有名な存在。六月に行われた「全国高校ゴルフ選手権東北大会」では、兄の玲於さんと兄妹そろって優勝。また、中学三年生で挑んだ「ミヤギテレビ杯」では、プロ選手との初ラウンドにも関わらず予選通過、ベストアマチュア賞獲得という活躍を見せ、注目されています。



蛭田みな美さん

家族の影響で三歳からゴルフを始め、「気付いたらやっていた」と生活の一部になっていました。「本当に難しい。だからこそやりがいがあると思います。上達する過程とできたときの



兄妹で優勝を果たした「全国高校選手権東北大会」。兄・玲於さん(写真左)と優勝盾を持ち、笑顔(写真提供：東北高校ゴルフ連盟)

面白さがあります」と魅力を教えてくれました。
現在は、飛距離を伸ばすことを課題として練習に取り組んでいます。「高校三年間で、女子アマで優勝。そして、海外で活躍できるようなプロ選手になる」という高い目標を持って、勉強と両立させながら練習に励んでいます。周囲の期待をプレッシャーと感じることなく、「ゴルフで活躍することで、鮫川村を知ってもらえれば」と話す表情に、今後のさらなる活躍を期待

SATSUKI YABUKI

赤坂西野在住・食生活改善推進員「ひまわりの会」会長

少しでも地域に恩返ししたい



矢吹さつきさん

ボ ランテア団体や地域づくり団体、団体とまではいかなくとも地区住民が結束し景観保全を行うなど、村内ではさまざまな活動が行われています。そして、村民の多くが



平成18年から参加している食生活改善推進員「ひまわりの会」。仲間たちと会話をして、笑顔を見られるのが楽しみの一つだとか。

それらの活動に積極的に参加し、地域に貢献しています。矢吹さつきさん(65)もその中の一人です。食生活改善推進員「ひまわりの会」の会長を務めるほか、精神保健福祉ボランティアサークル「やまゆりの会」、認知症予防のための「脳いきいき教室」の運営サポートなど、精力的に活動しています。

「実家の両親は体が弱くて、たくさんのお世話になりました。自分の時間が持てるようになったら、少しでも地域に恩返ししたいという気持ちは持ち続けていました。大したことではできなくても、私で役に立てることがあるなら活動をお手伝いさせてもらっています」。地域のつながりが濃い鮫川村。そのため、抵抗なくボランティア活動や一人暮らしの高齢者への声かけができたといいます。「いろいろなボランティア活動の中から、自分に合ったものを見つけて、自分が大切」と無理なく長続きさせるコツを教えてくださいました。

さめがわの輝く女性たち

2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」。幕末から昭和まで、激動の時代の中で自分の意思を貫き力強く生きた新島八重の生涯を描いています。

戊辰戦争の際には断髪・男装をし、銃撃戦に参加。その後も教育者として活躍、また、生涯にわたる社会福祉活動…。そして、いつからか「ハンサム・ウーマン」と称されるように。まさに生き方そのものが「ハンサム」。

時代は変わっても、信念を持ち前向きに生きる女性たちの姿は周りを明るく照らします。そんな輝く女性たちを紹介。



さめがわの輝く女性たち

SATOMI HAGA

村学校給食センター・管理栄養士

給食で子どもたち、地域に良い影響を

村 学校給食センターの管理栄養士・芳賀公美さん(28)。地産地消給食のおいしさや栄養価を競う「全国学校給食甲子園」には、大会史上最多の三回出場を果たしています。地元の特産品や郷土料理を積極的に給食献立に取り入れているほか、かむことを意識した「カミカミ献立」など、「給食を通して、栄養バランスの取れた食事の大切さはもちろん、食事の楽しさや鮫川村の良さを伝えたい」と話します。



芳賀公美さん



「食べることは体を作るだけでなく、「おいしい」と思う気持ちや人と食事をする楽しさなど、豊かな心を育む役割も果たす。

「地域の特色と密接に関係している『食』。そこから鮫川村のことを知って、好きになって、そして周りの人に伝えられるようになってほしいです。それが鮫川村に対する誇りにつながる

KIYOE HIRUTA

渡瀬在住・さめがわスポーツクラブ

誰でも参加できるスポーツ環境を

平 成二十二年設立の「さめがわスポーツクラブ」の立ち上げ当初から携わっている蛭田清代枝さん(42)。体育大学卒業のスポーツ知識を生かし、村民の体力向上に尽力しています。さめがわスポーツクラブが主催する子どもたちを対象にしたスポーツ教室や介護予防のための「筋力づくり教室」の運動指導員など、活動は多岐にわたります。

教室を始めた当初は、高齢者と子どもの運動能力や目的の違いから、対象者に合わせた指導に苦労したと話します。また、教室で受ける授業とは異なり、体育は子どもの個性が強く出ます。その中で、良い個性を伸ばしながら団体行動などの規律を身に付けられるよう指導に励んでいます。

「日々、教えることの難しさを感じています。でも、鬼ごっこなどの遊びの中で少しずつ足が速くなっていく子どもたちを見てみると楽しみで仕方ありません」と笑みがこぼれます。



小学低学年を対象とした「キッズスポーツ教室」。高学年になったとき、自分のやりたいスポーツに生かせるような体力を身に付けられるよう指導に励む。

YUKI INAZUMA

渡瀬在住・1ターン実践者

素朴な農村景観に一目ぼれ



稲妻由紀さん



自宅近くの畑で、数種類の野菜を作っている。休日には草取りや追肥作業で汗を流す。

平成十九年にソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を通して鮫川村を知り、月に一回の頻度で訪れるようになりました。「食べ物を作るところから食べるまで、自分で関わりたい」と農業に強い関心を持っていた由紀さんは、農作業を体験したり郷土料理を味わったりとさまざまな体験や人とのふれあいの中で、「鮫川村なら農業をしながら生活できそう。力を貸してくれる人もたくさんいるから何とか

なる」という思いが芽生え、移住を決意しました。鮫川村の素朴な農村景観に一目ぼれしたという由紀さん。田んぼや畑はもちろん、強滝などの溪流が暮らしの中に溶け込んでいることに「これ以上、美しい村はない」と感動。将来、自然の中で保育活動をする「森の幼稚園」を鮫川村で開設したいという思いを抱いています。「自然と人の暮らしの距離感が近い鮫川村だからこそできる」と声を弾ませます。

KUMIKO OTAKE

青生野在住・畜産農家

「やるしかない」という気持ちで前進

鮫 川村の主要産業である畜産。そのような畜産も東日本大震災、そして東京電力福島第一原子力発電所事故の影響から厳しい状況に立たされています。現在は、牧草地などの除染作業も進み、放射性物質の検査を受け基準値未満の干し草は牛用飼料として使用できるまでになりました。保有頭数が多い畜産農家では、男性は仕事務めで、女性が主となって牛の世話をしている農家が多くあり

ます。大竹久美子さん(50)は嫁いで三十一年。和牛の繁殖をしており、現在は二十八頭を飼養しています。「震災直後は、牛も落ち着かずストレスを感じている様子だった」と振り返りま



大竹久美子さん



「女性が接すると、牛の性格が穏やかになる」という人も。これからは発育のいい牛をつくっていきたいと意気込む。

す。昨年からは牛を放牧できない状況が続き、さらにストレスがかかる中で、受胎率の低下や出産時の異常などが現われたといまます。「原発事故前のように、牛を放牧してやりたい」という思いはある一方で、それが難しいという現状も理解しています。それでも「これまで牛に生かされてきました。生き物が相手ですから、ここでやめるといわずにはいけません。やるしかない」という気持ちです」と前を見据えています。